

城郭探訪

まちづくりと城の址

男鹿市 脇本城

半島の地の利を生かして 「秋田支配の重要拠点、脇本城」

男鹿市長(秋田県) 菅原広二



なまはげの里、男鹿市

男鹿市は秋田県沿岸中央部、三方が日本海に開けた男鹿半島を単独市で構成しています。平成17(2005)年に若美町と合併し、2025年に新市制20年を迎えました。半島という地理的特性を踏まえ、北前船の



大みそかに行われる男鹿のナマハゲ行事

寄港地として栄えましたが、より時代の古い中世から日本海海上交通の要所として位置付けられてきました。さらに、ユネスコ無形文化遺産である「来訪神・仮面・仮装の神々」の構成文化財の一つとして、国内的にも知名度の高い「男鹿のナマハゲ」など独自の文化も根付いており、男鹿市という自治体名よりも「ナマハゲ」という行事が圧倒的に知られているかもしれません。ナマハゲは秋田県全体で行われている行事ではないかと思われている方も多いかもしれませんが、男鹿半島独自の行事です。

未完の名城「脇本城」と男鹿半島

現在の秋田県中央部から北部の基盤を築いた中世安東氏は、織豊期の安東愛季ちかすえの時代、檜山(現能代市)と湊(現秋田市)に分かれる安東両家を併合し、脇本城を大規模に改修して居城したとされています。

日本海海上交通の要所として、また、八

郎潟(現在の太田村)を經由した内陸交通の要所としてこの地が選ばれたものと考えられます。同時に檜山と湊を見据えたほぼ等距離に位置していることも重要であったと捉えています。つまり、脇本城は、中世秋田の政治的、経済的、軍事的な重要拠点で



脇本城と城下町集落



脇本城内の曲輪(くるわ)と呼ばれる平場

あつたと考えられます。

脇本城は石垣のない、山城と呼ばれる城です。石垣を築く城(多くの方が一般的にイメージする城)が全国的に普及する前の城で、自然の山を切り盛りして平場を造り出し、建物や柵などを築くものです。城であると同時に、中世の大土木工事の跡でもあります。安東氏はこの脇本城を拠点に、かの有名な織田信長や豊臣秀吉ともつながりを持ち、戦国の世を生き残りました。

しかし、家督争いなどにより「名城成りといへども、普請いまた出来せぬか故」(青森県2005『青森県史資料編 中世2』)に放棄され、江戸時代に佐竹氏が秋田に入ってきた後には廃城となります。その後昭和30年〜40年代頃まで、近隣集落の草刈り場として共同管理されてきたことで畑地化されず、土塁などの遺構が現在も視認できる状態がよく残っており、平成16(2004)年に国の史跡に指定されました。平成27(2015)年から史跡整備事業を開始し、平成29(2017)年には続日本100名城に認定され、城郭ファンのみならず、多くの方にお越しいただける城に毎年少しずつ進化を遂げています。

城と住民とまちづくり

この脇本城跡と地域住民との良好な関係が約40年続いています。城下町集落の住民が「おらほ(私たち)の城」を昔の手入れされた山(城)に戻し、地域の憩いの場として、観光の拠点としようと、昭和62(1987)年に「脇本城址懇話会」を結成し、現在も活動が続けられています。



脇本城址懇話会による草刈り活動

中世秋田の安東氏は、この男鹿半島、脇本城を中心に政治的、経済的交流を全国規模で行いました。その遺志を継ぐように、現在では地元の方々を中心に、男鹿市も協力して歴史的、観光的交流を目的に全国からの来城者をお迎えしています。まちづくりは地元の住民とともにあり。男鹿市では住民とともに脇本城を未来へ残していく使命を重く受け止めています。

ナマハゲの起源

古くから男鹿のナマハゲの鬼は「お山」と呼ばれる本山と真山からやってくると伝わる。それぞれ本山には赤神神社が、真山には真山神社が鎮座し、どちらも「赤神」を祀っている。この「赤神」とは中国の前漢の武帝のことであり、ナマハゲの起源も中国にあると示唆されている。この武帝飛来伝説を、江戸後期の本草学者・菅江真澄の「おのしまかせ」から紹介したい。

前漢7代皇帝の武帝は、神仙になる方法を求めて各地に方士をつかわした。大前四年三月、ついに帝は泰山で王母に会して神仙となった。

武帝は赤旗を飾った飛車にのり、白鳥にこれを引かせ男鹿にやって来た。その車は五色のコウモリが前後左右を守っていた。

漢王朝は大徳にして赤帝なるがゆえに、武帝が舞い降りた山は赤神山と名付けられた。また、このことを耳にした景行天皇は、皇女をつかわして武帝の妃とした。これが赤木大明神となった。

武帝の飛車を守っていたコウモリたちは鬼が変化したもので、それぞれ眉間、逆類、眼光鬼、首人鬼、押領鬼という。

眉間と逆類は死亡してしまっただが、その他の三兄弟の鬼は顕在で、武帝とその妃とともに本山の中腹にある五社堂に祀られた。この三匹の鬼がナマハゲの原像となったという説があるという。

また、『来訪神事典』によれば、赤神とは天台宗3代座主の円仁が中国から招来した「赤山明神」であることから、ナマハゲはこれをベースに男鹿の風土や信仰的土壌を巧みに取り入れながら創造されたのだらうとある。